

機能強化事業の紹介

-飯塚市・嘉麻市・桂川町における2011年からの実践の振り返り-

-2017年度の機能強化事業の報告-



特定非営利活動法人ピーサス

高橋 智宏

機能強化事業の紹介

- 2011年からの実践を振り返る-



PEAACAS

機能強化事業の推進(概観)

事業推進の過程

第一期事業:2011年4月～2014年3月

- 児童発達支援センター ミィティアスにて、本事業を開始する
- 2011年4月～2014年3月: 第一期事業の計画と実施

第三期事業:2018年1月～

- 第二期事業の自己評価、第三期事業改造の計画立案
 - 第二期事業の反省と具体的な対策計画案の提案
 - 第三期事業での抜本的な評価体制の見直しに向けた計画の勘案

2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 | 2017 | 2018

第二期事業:2014年4月～2017年12月

- 2014年4月～2016年2月: 第一期事業の自己評価、第二期事業改造の計画立案
 - 第一期事業の反省と具体的な対策計画案の提案
 - 改造の基本的な骨子の検討と計画案の策定
- 2016年3月～2017年12月: 第二期事業の計画と推進
 - 第二期事業案に向けた計画案の具現化に向けた作業実施
 - 事業推進に必要な資料作成と現実実装に向けた準備
 - サービス利用者への説明会実施(2016年11月29日)※18名の利用者参加
 - 実際の二期事業対応開始(2016年12月末より対応開始)
 - 第二期初期評価対応開始と評価の完了

初期事業 計画立案の詳細

初期事業開始に至るまでの事業内容の選択的過程

◆療育等機能強化事業の具体的内容

- 訪問による療育指導
- 外来による専門的な療育相談、指導
- 障害児の通う保育所や障害児通園事業等の職員の療育技術の指導
- 療育機関に対する支援

◆「外来による専門的な療育相談、指導」を初期整備案の原則として抽出した

- | | |
|-------|---------------------------------|
| 抽出理由① | 外部機関との連携を挟む事業実施には行政の横断的協力が必須である |
| 抽出理由② | 本事業該当児への対応には、当然詳細な評価が必須となる |
| 抽出理由③ | 本事業の指針となる評価モデルの提案が、知れるところで存在しない |

◆発達相談等を通じた相談対応の専門化の促進

- 当該児の問題点の具体的な評価実施機能の充実
- 当該児の発達や行動面等の問題に関する分析・説明の詳細化
- 当該児及びその保護者に対する広範な、問題の適切な理解の促進
- 当該児の経過の有機的な追跡

初期事業創成の具体化の過程

機能強化事業…外来による専門的な療育相談、指導の充実に向けてシステムの構築)

問題点の反芻と提案:

- ①当該地における現行の療育・地域支援には専門的な対応がなされているのか?
- ②療育に係る専門的支援のモデルは存在するのか?
- ③地域連携を構築する以前に各専門領域の役割が成長・発展されているのか?
- ④指導・相談以前に障がい特定に関するサポートシステムは適切に運用されているのか?

当面の目標設定として:

当面、問題点の提案はあったとしても、上記提案を自ら反芻し、自らで答えを見つけるには、兎にも角にも相談情報を集約するバス運用の適切運用の適正実施が求められ、バスの運用方針を計画し、其れに沿って運用を開始した。

初期事業の概観

初期事業:2011年4月～2014年3月

- 初期事業の計画と実施:2011年4月～2014年3月
- 相談支援事業の具体的な流れ
- 事業実施の現実的sequence flowの立案:

初回相談の精度・品質のUP

- ①待ち受け対応型相談支援：基本的に来所または電話事前相談等に対する初回情報聴き取り時の内容の充実と精度UP
- ②初回情報聴き取り時に大枠での当該児への必要な基本的対応と支援の予測性up→可能な限り対応のspeed upをはかる
- ③当該児への問題に関する対応チームの認識を深化させ、その情報の共有化の精度upをはかる

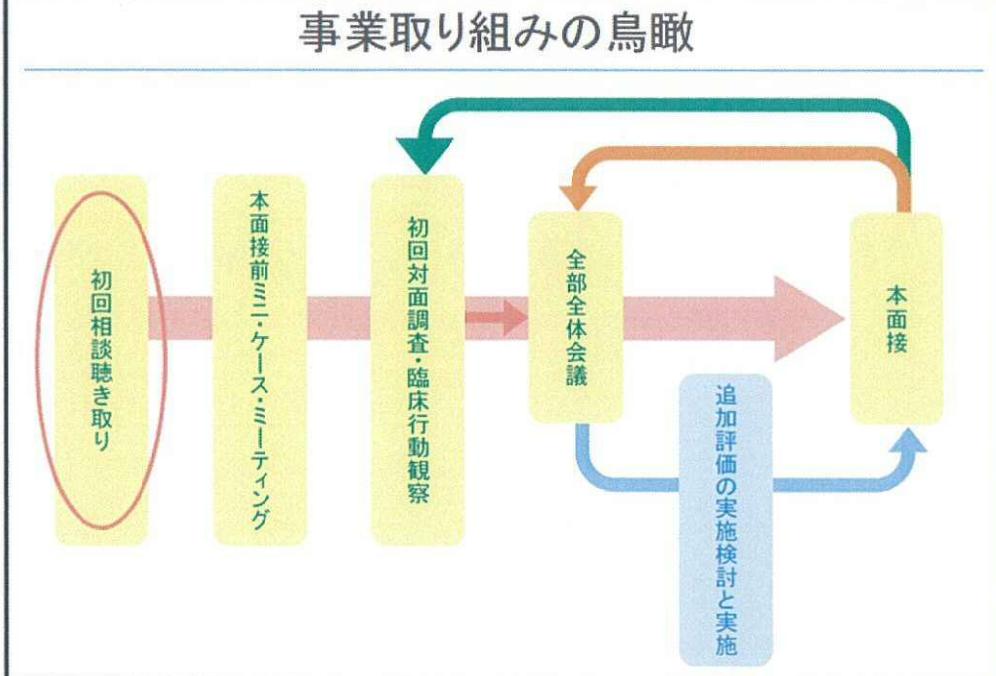
当該児の
問題点の現実的な把握の促進
効果的な情報修正の精度up
対応に関する深化した認識up

- ①初回情報の効果的な捕捉と修正、同時に進行する当該児の現実的な問題の早期把握に努める
- ②当該児の状態に関する判断資料の全体的総括、当該児への適切な取り組みに向けた対応の発案
- ③予測されるリスク(当該児の問題及び周辺領域)と、同時にリスク背景となる状況に因果する禁忌事項への認識と具体的な効果的対応への意識
- ④対応に向けた導線形成

より詳細な評価を必要とする児への対応に
向けて

- ①当該児に纏わる資料の総括を経ての更なる状況確認の必要性の検討
- ②より慎重な対応に向けての導線形成

事業取り組みの鳥瞰



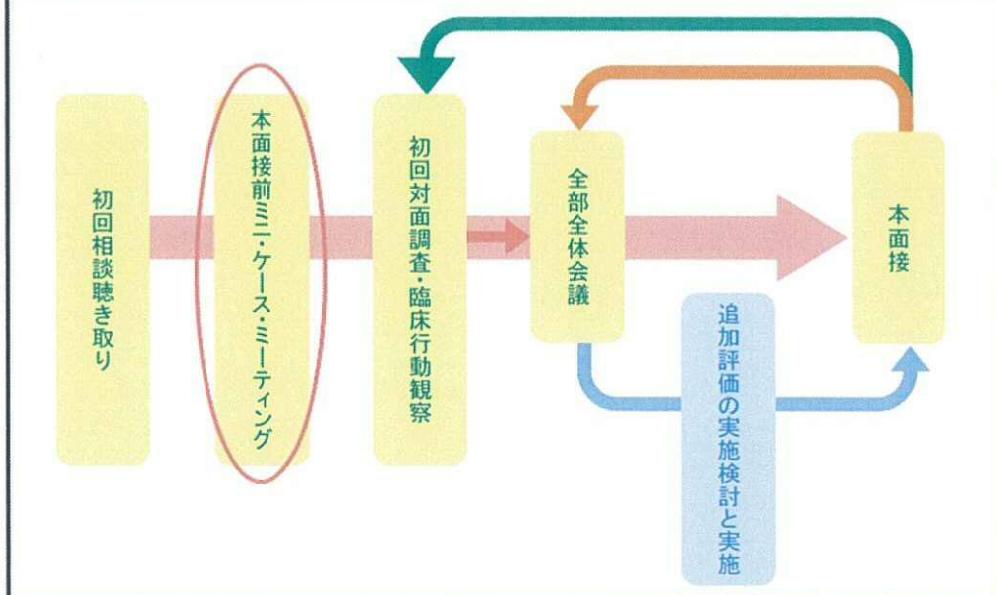
初期事業 実際の取り組み説明①

初回相談の精度・品質のUP に向けて

・**初回相談基本情報聴取**：基本情報資料および記録資料作成に向けて…
来所及び電話等で実施する初回相談基本情報の集積

- ① 相談者基本情報
- ② 相談者医療関係の情報
(妊娠・分娩時の状態、乳児期初期の発達経過、現在の医療受診状況)
- ③ 当該児が診断を受けている場合はそれに関する関連情報
- ④ 当該児生活年齢までの乳幼児期以降の主な発達関連情報
- ⑤ 現在の当該児が示している当面の保護者が認識している児の問題
- ⑥ 当該児の示す問題・状況に関連するかもしれない当方からの質問と、
それに関する保護者からの応答
- ⑦ 当面の相談者のニーズ
- ⑧ 対面相談の可能性の説明と、対面の場合の日程の予備的押さえ
- ⑨ 連絡先と連絡対象者、連絡時間等の都合確認
- ⑩ 電話等で実施する初回相談基本情報聴取の完了

事業取り組みの鳥瞰



初期事業 実際の取り組み説明②

当該児の
問題点の現実的な把握の促進
効果的な情報修正の精度up
対応に関する深化した認識up

に向けて

初回相談基本情報に基づく関連スタッフ共有と具体的な対面

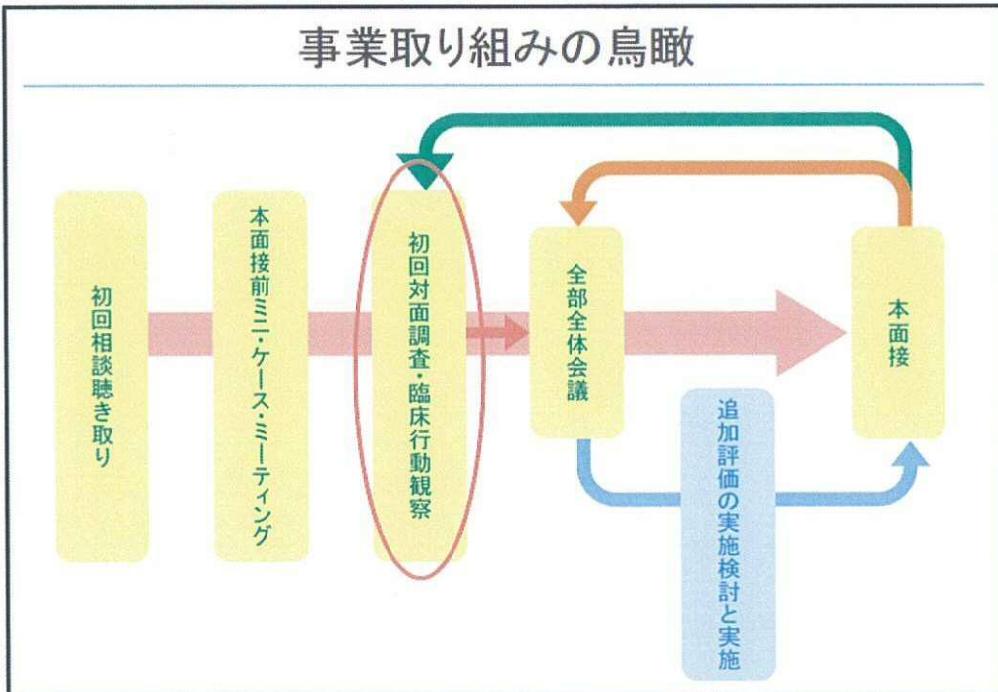
本面接前ミニ・ケース・ミーティング :

機能強化事業に関わるメンバー（3～4名：ネットを介した情報共有あり）にて初回相談基本情報の確認を行い、新たな当該児への認識を積層する為の軒先ミーティング

本面接前ミニ・ケース・ミーティングの機能と役割 :

- ① 初回相談基本情報からの問題点と現状の把握
- ② 予測される初期的な問題点があれば、関連スタッフ間で共有
- ③ 対面相談の必要性の有無検討
- ④ 初回対面聴き取り時の追加確認情報の共有
- ⑤ 初回臨床観察の実施予定チェック
- ⑥ 当該児保護者への連絡導線の確認
- ⑦ 散会 → 当該児保護者への対面相談日時の調整と決定

事業取り組みの鳥瞰



初期事業 実際の取り組み説明③

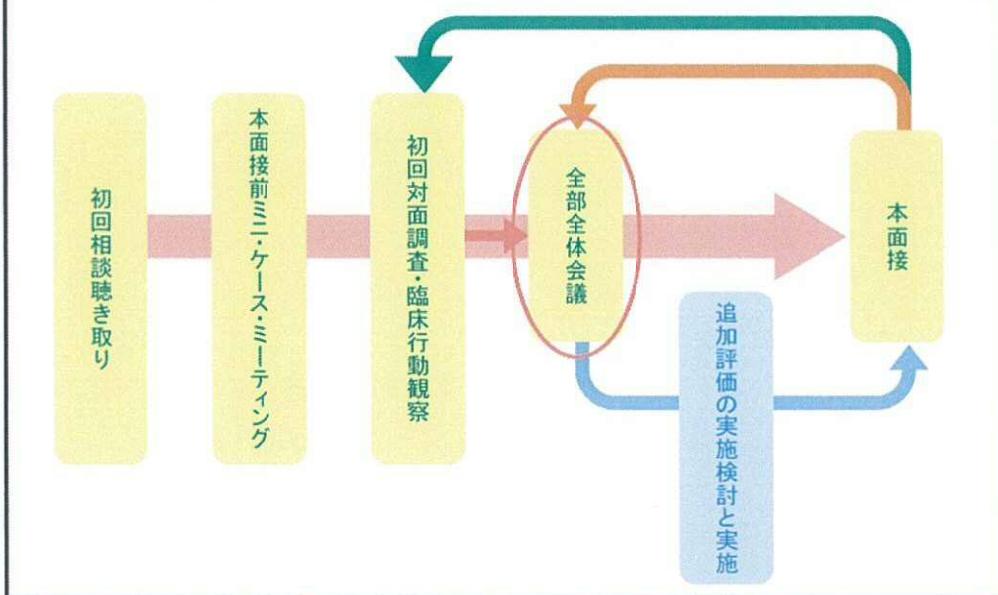
当該児の
問題点の現実的な把握の促進
効果的な情報修正の精度up
対応に関する深化した認識up

に向けて

初回対面調査：保護者への初回対面聞き取り、及び臨床観察の同日実施

- ① それまでに確認した事項を中心に、必要と思われる追加情報を聞き取り → フォスク機能強化事業担当者が対面にて実施 → 書類作成
- ② 臨床観察チェックリストに沿って、複数スタッフにて遊びの場を構成した場面における行動観察 → チェックリストの記入完成
- ③ SDQ等の簡易観察評価を保護者に求め、記入・採点後に資料を作成
- ④ 全ての資料を全部全体会議に向け、利用できる形に修正・整理
- ⑤ ※場合によって、発達・心理評価等に先んじて臨床場面での詳細評価実施を行う場合がある

事業取り組みの鳥瞰



初期事業の計画と実施内容

・全部・全体会議 :

- ①全部資料編成会議と②全体像解釈会議の、一連の会議

①全部資料編成会議 :

資料全部を持ち寄った会議で、【初回相談基本情報】【ミニ・ケース・ミーティング取り纏め資料】【初回対面聴き取り資料】及び【臨床観察資料】【SDQ関連資料】等、全ての資料を持ち寄ったケース会議の実施

・全体を通して資料の内容確認と協議、問題点の有無とその内容の検討を行う

・問題点の有無とその内容の検討 :

更に深化した問題点の確認を、特に臨床観察資料を重視して行ない、実行機能・言語・コミュニケーション・知的機能・感覚運動機能認知機能等に係る可能性のある障がい側面に関して問題点の具体的箇条表記を行う

初期事業の計画と実施内容

- ・全部・全体会議：

- ②全体像解釈会議：

当該児の有する問題点の明確さの度合いに応じて、想定されるその後の対応を予測検討し、複数の場合から適切な状況を選択し対応のフローを判断し、情報提供の範囲を勘案して対応メニューを確定する

- ・現時点での当該児の状態に関して示すべき問題のリストアップと状態のおよその解釈と説明の実施を想定して情報共有と追加の必要性のある評価をリストアップする
- ・もし、必要とされる追加される評価メニューがあれば、其れに関して、実施スタッフと確認し、意思疎通を行い、追加評価メニューを検討し、確定する
- ・相談者・保護者にフィードバックする事を前提とした当該児の把握した状態の確認と情報としての返し方も確認する
- ・相談者・保護者にフィードバックする際の説明に附帯する禁忌事項、留意事項の確認と出来るだけの共有する

- ③今後の対応スケジュールの導線確認と当該保護者への連絡方法等について確認する

2017年度 機能強化事業の報告

【2017年度】相談支援の利用状況

●:相談支援利用状況の基礎情報

2017年度の相談支援の利用状況は、

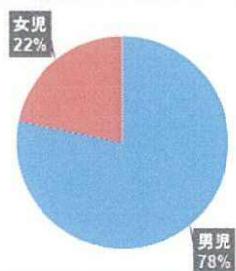
延べ件数:190件 利用者数:46名

1名あたりの平均利用件数:4.13件★最頻値は5~6件 (最少:1件／最多:10件)

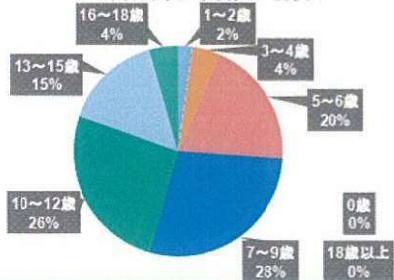
利用者の性別:男児36名 女児10名

利用者の年齢的特徴:7~12歳(小学生)で過半数(54%...25名)を占める

利用者性別の割合(46名)



利用者年齢の割合



【2017年度】相談支援の利用状況

●:相談支援利用状況の基礎情報

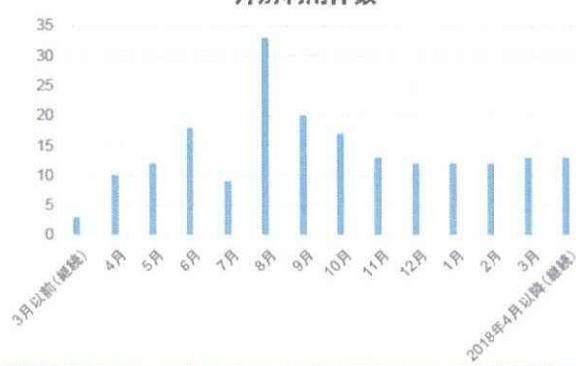
月別利用件数:月平均15件

8月が最多(33件)、次点が9月(20件)

平均対応期間:17.8週間(最多:47週間 最少:1週間)

極端に長期化(40週以上)したケースは2名のみ

月別利用件数



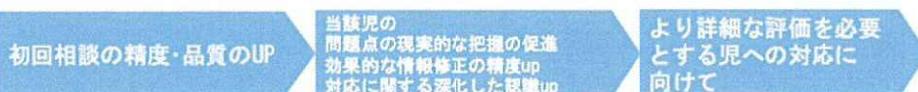
質的分析 テキストマイニング

●テキストマイニング：

機能強化事業に該当するサービスを利用した利用者(46名分)の報告書をテキストマイニングを使い、質的に分析した。

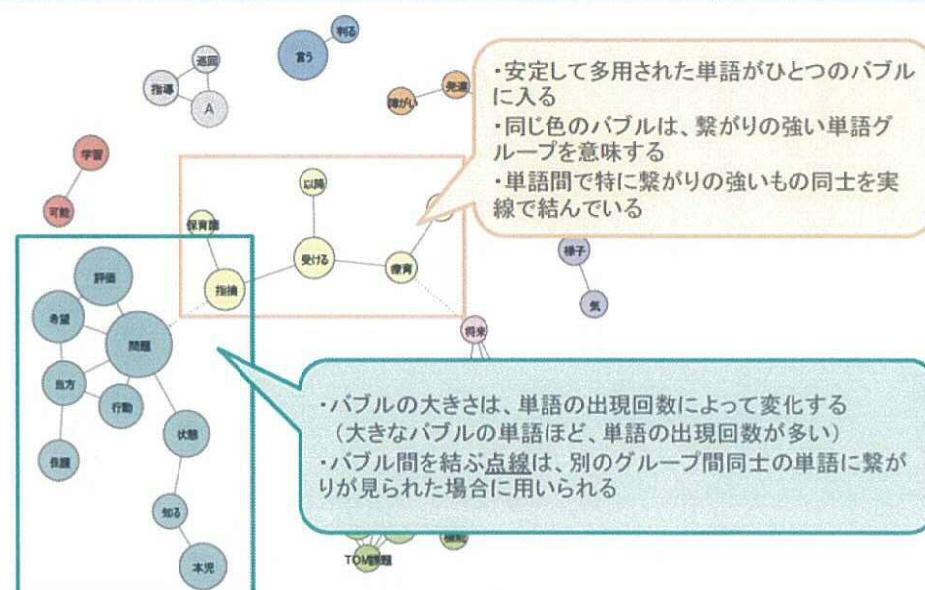
報告書の当該期間に記述された内容を分析し、単語同士のつながりを可視化(共起ネットワークを作成)することで、利用者に対して行った対応の一貫性を検討した。

分析の目的としては、機能強化事業が目標として掲げている下記の3点を

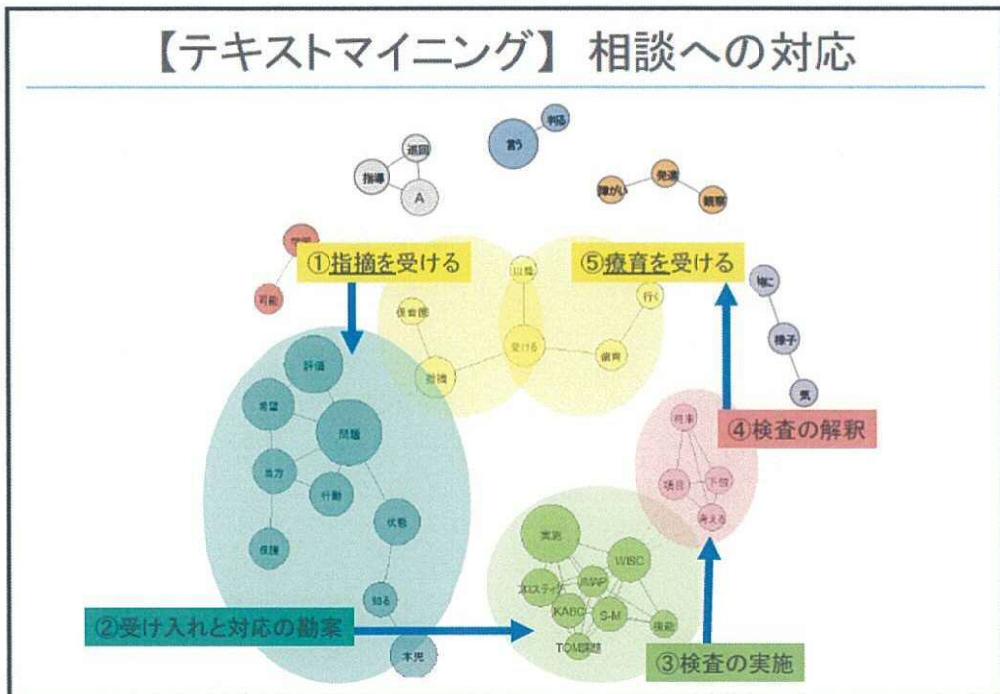


利用者全体に対して包括的に上記が達成できているかを、報告書の記述から確認することを第一とした。

【テキストマイニング】共起ネットワークのみかた



【テキストマイニング】相談への対応

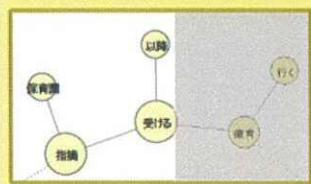


【テキストマイニング】 解釈の例

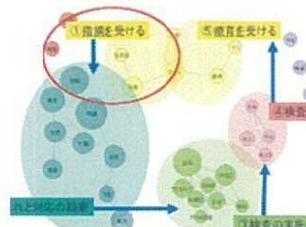


【テキストマイニング】相談への対応

①指摘を受ける

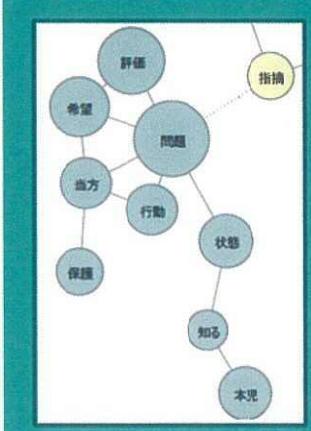


「指摘」と「受ける」のつながりが特に強いため、相談支援利用の発端としては何らかの問題を他者(保育士・教師や施設スタッフ)から指摘されることから始まる可能性が極めて高い。特に保育園に通園しているケースに関しては「保育園」、特に保護者から信頼されている保育士からの「指摘」が相談支援に繋がりやすいことが示唆された。



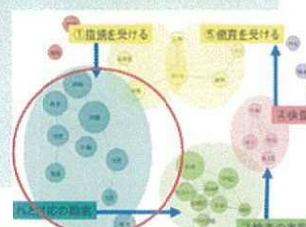
【テキストマイニング】相談への対応

②受け入れと対応の勘案



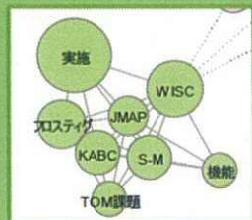
「指摘」された「問題」に関して、保護者と児本人への一貫したアプローチを行えていることが示唆された。

「施設(当方)」が「保護者」と繋がって、「希望」を聞き取りながら「行動」観察や「評価」を試みている。また、こうしたアプローチが、「児本人(本児)」の「問題」の「状態」を「知る」ためであるという前提も守られていることが、報告書の記述からも窺える。

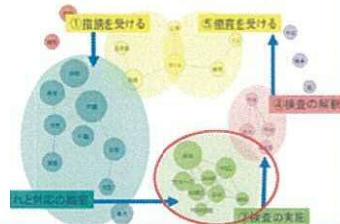


【テキストマイニング】相談への対応

③検査の実施

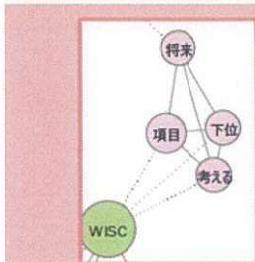


「実施」検査が「WISC」「JMAP」「KABC」「S-M」「フロスティグ」「TOM課題」と挙げられており、また、これらが複雑に繋がりあっている様子がわかった。このことからも、検査自体を行って後に多面的な視点で子どもの状態把握を試みていることが確実に示唆された。

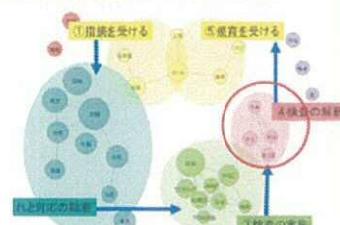


【テキストマイニング】相談への対応

④検査の解釈

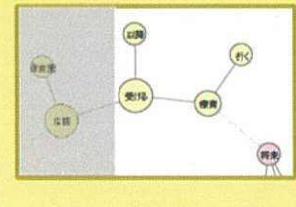


特に情報量の多いWISCについては「下位検査」や「項目」間から、子どもの「将来」的な発達の様相や抱えるであろう問題に対する言及、「将来」を見据えた療育に繋がるよう「考え」解釈を行うよう努めている様子が見受けられた。
ただし、WISCのみでの判断はリスクを孕むため、検査系統の拡充・見直し、再検討が肝要である。

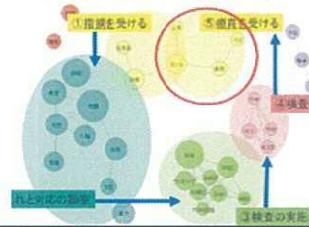


【テキストマイニング】相談への対応

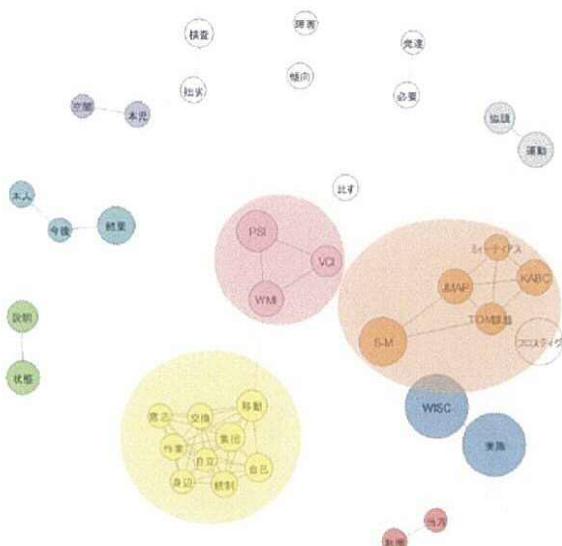
⑤療育を受ける



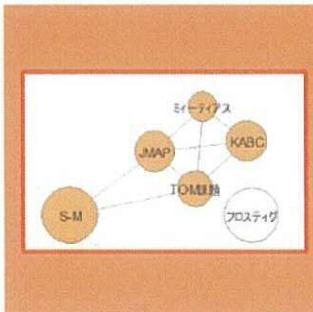
評価の結果を解釈し、「将来」的な発達や解決に向けて「療育」の意味を説明し、実際にこの提案から「療育」を受けにミィーティアスに行こうという流れが選択されていることも示唆された。



【テキストマイニング】 検査結果の解釈



【テキストマイニング】検査結果の解釈

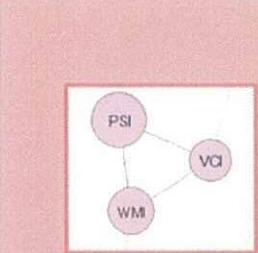


検査結果の解釈においては、他の検査と関連させつつも、S-M社会生活能力検査が特に解釈を広げるにあたって役割を担っていることが分かった。つまり、こども達の現実的な生活の問題に関する視点が重要であることが示唆された。
児の現実的な機能を更に詳細に把握するため、新たな評価体系では、より詳細に生活機能を評価するためのツールを導入する必要があると認識された。

【テキストマイニング】検査結果の解釈



S-M社会生活能力検査においては、全ての要素が複雑に関係し合っていることが指摘されている。
複数のケースで共通して特に項目に突出した要素がないが、自律的な児自らの判断に基づく移動の能力低下が比較的見受けられることが判った。



WISC-IVに関しては、特に「PSI(処理速度)」「VCI(言語理解)」「WMI(ワーキングメモリ)」の3指標が特に関連して指摘されていることがわかった。
特に当方の相談者にVCIとWMIが低く、PSIが高い児が増加している傾向にあるためだと考えられる。
このようなケースは、小学校高学年になるにつれて能力面の問題が進む可能性があり、多くの場合経過の詳細な観察が求められる。

まとめ

- 報告書内の記述から、以下の内容が示唆された。
 - ◆ 相談受付からインテーク、対応の決定、検査等の実施・解釈、処遇の決定までの流れができており、それぞれに関連し合いながら有機的に進められている。
 - ◆ 当初の目標である、児ひとりひとりの傾向を検査や行動観察から詳細に把握し、療育に繋げていくことが一定の水準で行われていることが認められた。

- 報告書の記述内容により機能強化事業の目標が一定の水準で達成されたことが分かったものの、以下のデメリットが考えられる。
 - ◆ 利用状況の情報と比較すると、こども1名あたりにかかる時間が長い。
 - 相談者および当該児の抱える問題が複雑であるケースが多く、複数回に分けた対応が必要になることがほとんどである。(特に思春期以降の児に多い)
 - 複数の検査を実施し、各検査の解釈と複数の検査全体の解釈から問題点の有機的な把握、その解決に向けた療育の提案を行える人材が少ない。
 - ◆ 検査実施に当たって発生するコストの問題が存在する。